

田村北遺跡

田村遺跡群

田村西遺跡

関遺跡

# 道路開発で あらわれた遺跡展Ⅴ

## — 高知南国道路建設に伴う 発掘成果から —

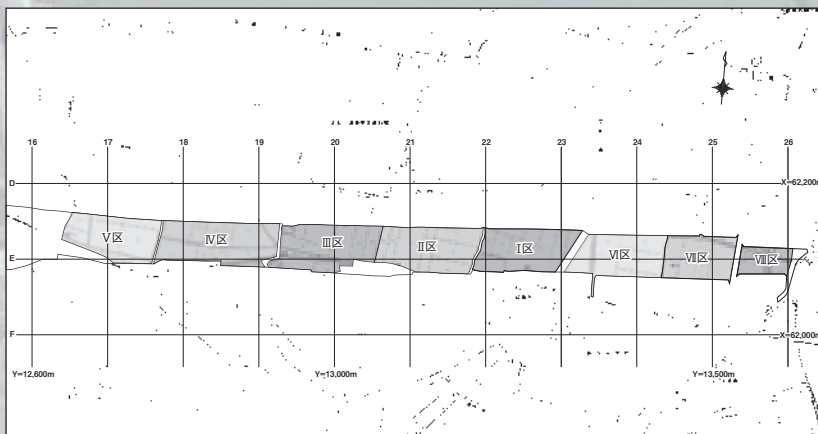
### はじめに

埋蔵文化財センターが実施した遺跡の発掘調査の中で、道路開発に伴う発掘調査で明らかとなった遺跡を紹介する企画展示で、5年目に当る平成23年度は高知南国道路建設に伴って発掘調査を行い、昨年度整理作業が完了した西野々遺跡について展示紹介します。

西野々遺跡は、平成15年度に実施した事前の試掘調査で、弥生時代から近世にかけての遺構・遺物が周知の茶田遺跡を含めた西野々地区の約88%で確認され、さらに地元の要望もあり、大字を取って名称変更した遺跡です。遺跡は、物部川とその支流によって形成された扇状地末端部に立地する弥生時代から近世にかけての複合遺跡で、弥生時代中期後半から後期前半の集落、奈良時代後半から平安時代中期にかけての官衙関連遺構、室町時代の屋敷跡と集落に特徴付けられます。

平成16年度から平成19年度にかけて実施した発掘調査で検出・復元した遺構は、竪穴建物跡68軒、竪穴状遺構27軒、掘立柱建物跡260棟、塀・柵列跡82列、土坑510基、溝跡368条、井戸跡3基、道路遺構3条、畝状遺構37列、水溜り状遺構2基、性格不明遺構5基、ピット

20,646個を数え、中でも、遺跡の東部に当るⅥ～Ⅷ区で確認された弥生時代の集落跡（竪穴建物跡65軒）、方形の柱穴で構成された古代の官衙関連遺構とみられる掘立柱建物跡78棟や道路遺構、一辺35～44mの溝で区画された中世の屋敷跡などが注目されます。また、これら遺構などから出土した遺物は197,475点に上り、3,658点が復元図示されています。



① 西野々遺跡調査区全体図 (S=1/10,000)

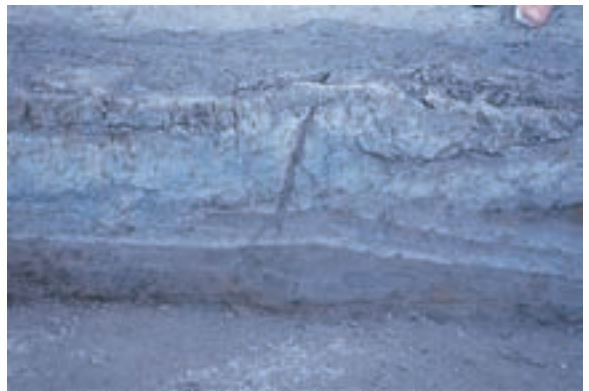


# 遺跡の古環境と地形発達史

西野々遺跡は現在の地形からみて、物部川が形成した沖積扇状地末端部に立地すると推測されるものの詳細については判然としませんでした。今回は自然科学分析を積極的に取り入れて調査した結果、その様相が概ね判明しました。

まず、この地に人が居着く以前の様相について、V区に堆積する腐食質泥層の下層調査で、埋没木が偶然に検出されたことにより、放射性炭素年代測定を行うことができ、その年代が推測できるようになりました。すなわち、遺跡が立地する沖積扇状地および周辺の氾濫原面はCal BC 4450～BC 3900前後、縄文時代前期後半頃およびそれ以前に形成されたものと考えられるようになったのです。地震跡(噴砂跡)も確認されました。

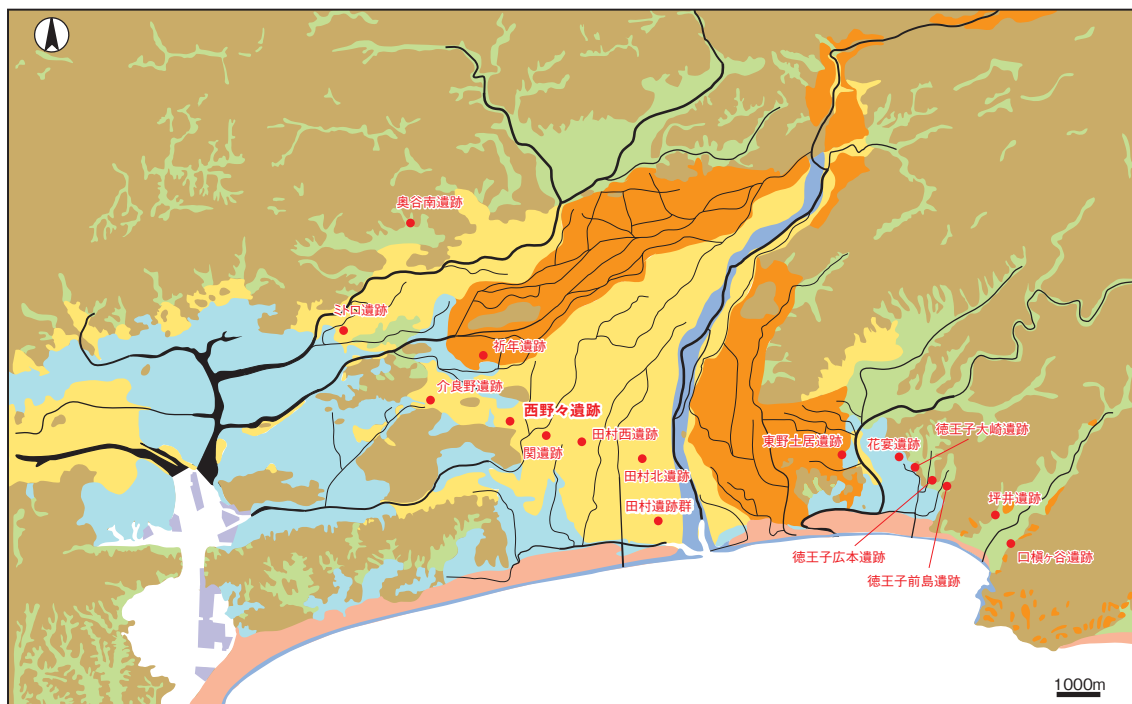
また、この上層からは、新たな流路堆積物や粗粒の氾濫堆積物が認められないことから遅くとも縄文時代前期後半頃には離水し、古代頃まで古土壌が長期に亘って形成されたものと考えられ、安定し乾燥した微高地となったとみられます。物部川の沖積扇状地および自然堤防状の高まりに立地する遺跡はほぼ同じ環境下にあったものと考えられますが、人が居着き、その痕跡を地面に残すようになるのは今のところ弥生時代を待たなければなりません。なお、人の沖積地への進出は、田村遺跡群から縄文時代後期の遺物が出土していることからその頃には始まっていたものと考えられます。



② V区西端のトレンチで確認した地震跡(噴砂跡)

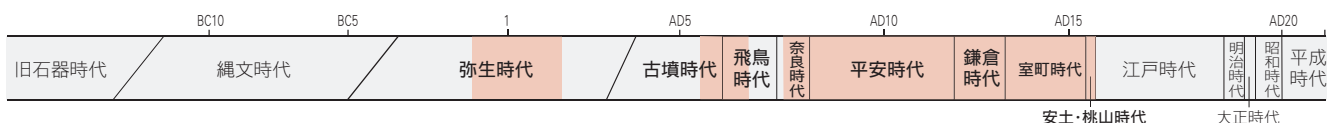
このような地形が形成された要因は、物部川の河川堆積によるものですが、砂礫層の堆積による高まりとその周囲にみられる後背湿地などの凹地や氾濫原が形成されていることから網状流路による堆積と推察されます。

つまり、西野々遺跡は、物部川の氾濫でできた網状流路によって縄文時代前期後半までに形成されたと考えられる北東から南西へ舌状に伸びた沖積扇状地および自然堤防状の高まり上に立地した遺跡であると言えます。この中で、遺跡の中心部は微高地が最も広いI区から東のVII区までに形成されたこととなります。また、Ⅲ区中央部からIV区にかけても微高地が形成されており、比較的多くの遺構が検出されています。



③ 香長平野の地形と遺跡の立地  
凡例  
丘陵・山地斜面 台地 沖積扇状地・自然堤防 三角州平野 氾濫原 浜堤・砂礫州 河原・砂浜 埋立地 流路・水路  
(高知県, 1966の一部を改変して作成)

④ 西野々遺跡年表

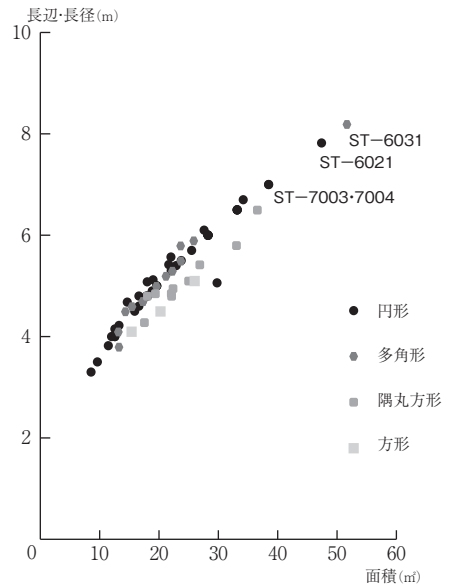


# 集落の出現－弥生時代

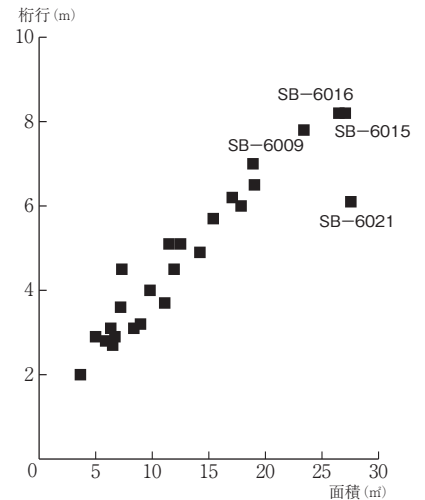
集落の出現は、弥生時代中期に遡ります。存続時期が一定推測される竪穴建物跡は概ね中期中葉(Ⅲ様式)から後半(Ⅳ様式)を中心に、中期前半(Ⅱ様式)から後期初め(Ⅴ様式)頃まで存続したものと考えられます。その後は、遺物の出土はみられるものの明確な竪穴建物跡は確認されておらず、再び竪穴建物跡が確認できるのは終末期で、4軒(Ⅰ区で1軒、Ⅵ区で2軒、Ⅷ区で1軒)が検出されています。

まず、集落の立地についてみてみると、西野々遺跡では東約1/4に位置します。この部分は、西野々遺跡の中で、唯一四方に開け、かつ基盤の砂礫層の上に粘土質シルトないしシルト質砂を主体とする堆積物が埋積した比較的掘削し易い部分でもあり、立地的に最適地であったものと推察されます。この中で、竪穴建物跡は、Ⅵ区北西端を中心に南東方向へ楕円形状に広がっているものとみられ、最盛期の中期中葉から後半に最も大きな拡がりとなり、東西幅は約300mに及びます。南北幅については判然としませんが、南の香長中学校で南国市教育委員会が行った発掘調査でも竪穴建物跡が確認されていることから、200m以上の拡がりも推定され、全体で200軒程度の竪穴建物跡が存在したものとみられ、想定される集落の面積は47,100㎡程度と考えられます。

竪穴建物跡の規模についてみてみると、床面積は、最大のものがST-6031の51.78㎡、最小がST-6005の8.55㎡、平均が22.85㎡です。建物構造的に際



⑤ 竪穴建物跡の規模



⑥ 弥生時代掘立柱建物跡の規模

時期	弥生時代中期			弥生時代後期		古墳時代 前半
	前半 Ⅱ様式	中葉 Ⅲ様式 (古) (新)	後半 Ⅳ様式 (古) (新)	前半 Ⅴ様式	後半	
平面形態	BC300~200	BC100	0	AD100	AD200	
円形 (不整形円形も含む)	[Shaded area]					
多角形 (五~七角形)	[Shaded area]					
隅丸方形	[Shaded area]					
方形	[Shaded area]					

⑦ 竪穴建物跡形状別変遷図

立った違いは見出せませんが、床面積には一定の較差が看取されることから、集落内での格差が生じていたものとみられます。



⑧ Ⅲ区で確認された溝(水路)跡

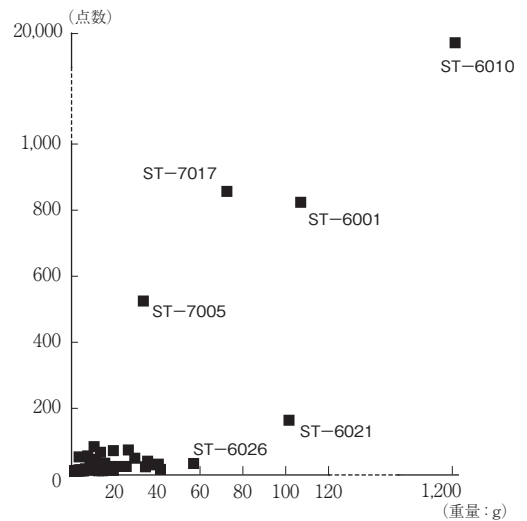
規模と共に視覚的に分かり易い形状についてみてみると、円形(最大:47.39㎡、最小:8.55㎡、平均:23.01㎡)、多角形(最大:51.78㎡、最小:13.20㎡、平均:21.49㎡)、隅丸方形(最大:36.58㎡、最小:17.55㎡、平均:24.31㎡)、方形(最大:26.01㎡、最小:15.38㎡、平均:20.55㎡)へと漸次移行していることが、出土遺物から判明しました。

また、Ⅲ区からは弥生時代から中世にかけての溝(水路)跡が重複して多数検出され、長期に亘って灌漑用水路としての機能を果たしていたものとみられ、古くからの水田経営の様子が窺えます。

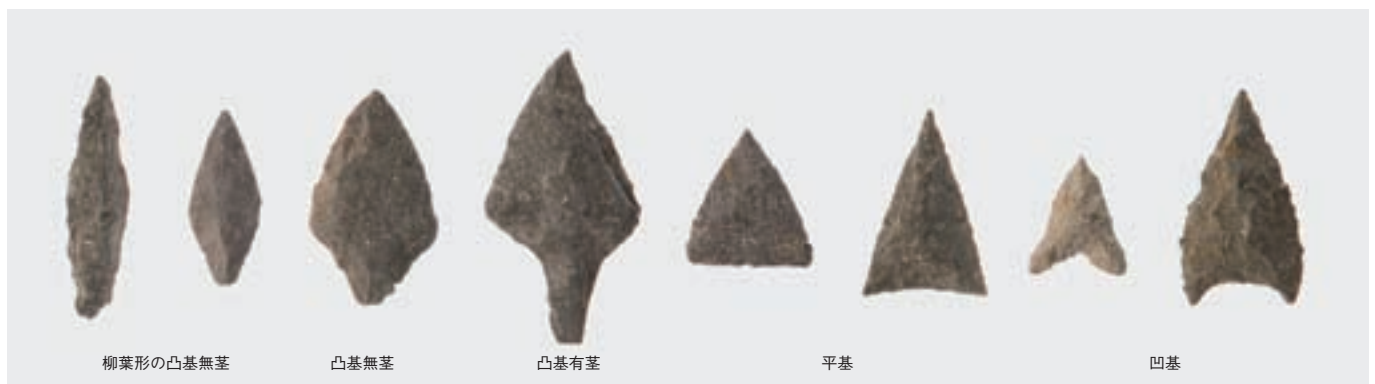
## サヌカイト

弥生時代の遺構を中心に、製品である打製石鎌が数点、剥片が十数点各竪穴建物跡から出土しています。その量は全体で22,842点(約3.3kg)でした。竪穴建物跡別の出土状況は右のグラフのようになり、特定の竪穴建物跡で特異な出土状況を示しています。すなわち、ST-6010からは一般の竪穴建物跡の約1,200倍、重量で約92倍の量の剥片が出土しています。また、剥片点数ではST-7017、ST-6001、ST-7005、ST-6021、ST-6026などからも一般の竪穴建物跡の数倍から十数倍の量が出土しています。

このことからST-6010は打製石鎌を中心としたサヌカイト製品の工房跡と考えることができます。製品として遺存していた13点の打製石鎌は、未配付のものとみられます。また、ST-7017などについても、工房跡と看做すことができるのではないのでしょうか。



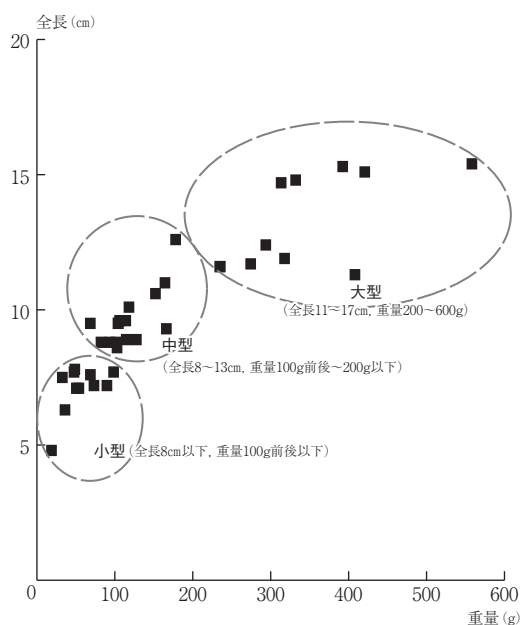
⑨ 竪穴建物跡別のサヌカイトの出土状況



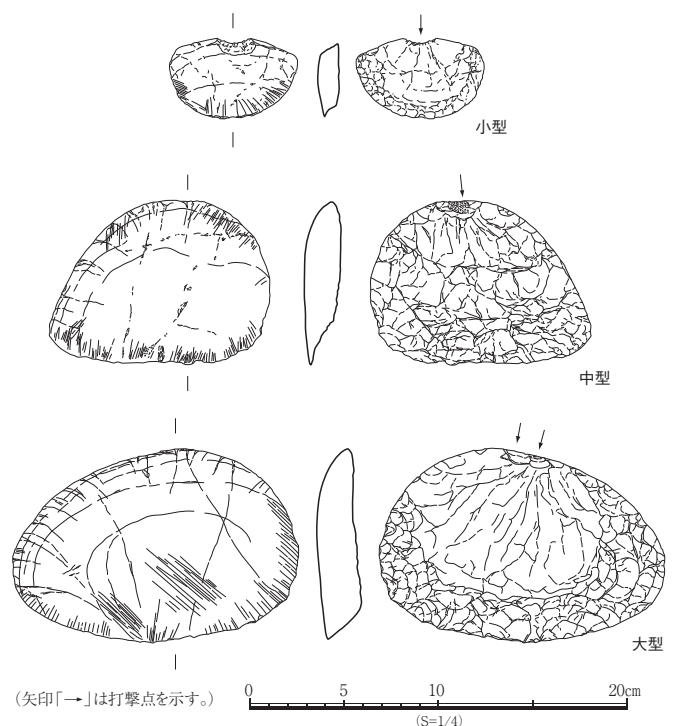
⑩ サヌカイト製の各種打製石鎌(原寸)

## 打製石鎌

SK-6020から53点が埋納された状態でまとまって出土しました。大きさにより3種に分けることができ、明らかに区別していたものと考えられ、使用者が異なることを意味するものと思われます。すなわち、大型が男性、中型が女性、小型が子供用とみられ、イネ科植物も含め草刈りに使用していたのではないのでしょうか。



⑪ 打製石鎌重量分布図



⑫ 各種打製石鎌



## 石庖丁

石庖丁と判断されるものが23点出土しています。この内、紐孔を穿孔していたものが13点あり、2穴のものが9点、1穴のものが1点みられ、2穴か1穴かはっきりとしないものが3点ありました。これ以外に両端に抉りを設けたものが7点みられます。残りの3点は残部がわずかで、穿孔されていたのか抉りが設けられていたのか判然としません。石材には粘板岩、千枚岩、赤色・白色頁岩、サヌカイトが使用されており、サヌカイト製のものは石質上、紐孔を穿孔できない

ことから両端に抉りを設けたものとなっていますが、穿孔しようとして割れ、結局破棄したものが1点みられました。



14 抉りのある打製石庖丁



15 紐孔1穴の磨製石庖丁



16 紐孔2穴の磨製石庖丁

## 石斧

今回の調査では、34点の石斧が出土しました。これらは、用途によって使い分けられており、伐採用としての蛤刃石斧(大型蛤刃石斧)、加工用としての柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、ノミ形石斧などがあります。これ以外に、用途に諸説のある環状石斧も出土しています。

これらは石材にも特徴があり、蛤刃石斧(大型蛤刃石斧)や環状石斧には緑色岩、柱状片刃石斧には結晶片岩、扁平片刃石斧やノミ形石斧には蛇紋岩や粘板岩を主に使用して製作されています。



17 扁平片刃石斧

## 古墳時代

古墳時代は弥生時代に比べると低調で、その痕跡が確認できたのはⅢ区で、時期的には古墳時代後期に当り、溝跡数条と竪穴状遺構1軒が検出されました。この竪穴状遺構の性格については、付属遺構や出土遺物が限られ判然としませんが、仮住まい的なものであった可能性も考慮されます。また、検出した溝跡は後世の溝跡によってその大半が掘り込まれていましたが、辛うじて残った部分から6世紀末～7世紀前半頃とみられる須恵器や土師器が比較的多く出土し、当時の様相の一端を窺わせます。

今回の調査ではこの時期の集落は確認されませんが、周辺に後期古墳(住吉山1～4号墳、吾岡山古墳)が築造されていたことから付近には当時の集落が存在したものと考えられます。これに続く7世紀後半の白鳳期についても、遺物が散見され、掘立柱建物跡などの遺構が存在したものとされます。



18 須恵器 提瓶

## 古代

弥生時代と共に西野々遺跡を特徴付ける時代で、方形の掘方を持つ掘立柱建物跡が多数復元されました。規格性のある建物群は、官衙(役所)関連の遺構と考えられ、奈良時代から平安時代にかけて何らかの官衙(役所)が設置されていたものとみられます。

復元した掘立柱建物跡はI区で12棟、II区で4棟、III区で10棟、IV区で6棟、VI区で20棟、VII区で58棟の計110棟に上ります。VI区とVII区からは中枢部分とみられる建物群が検出され、中にはSB-7004のように一辺が1.50mを測る柱穴で構成された大型建物跡も確認され、かつ陶硯、緑釉陶器、製塩土器なども出土し、官衙関連施設であったことをさらに強く印象付けます。また、先の建物群の性格と密接に関連するであろう道路遺構も検出されています。

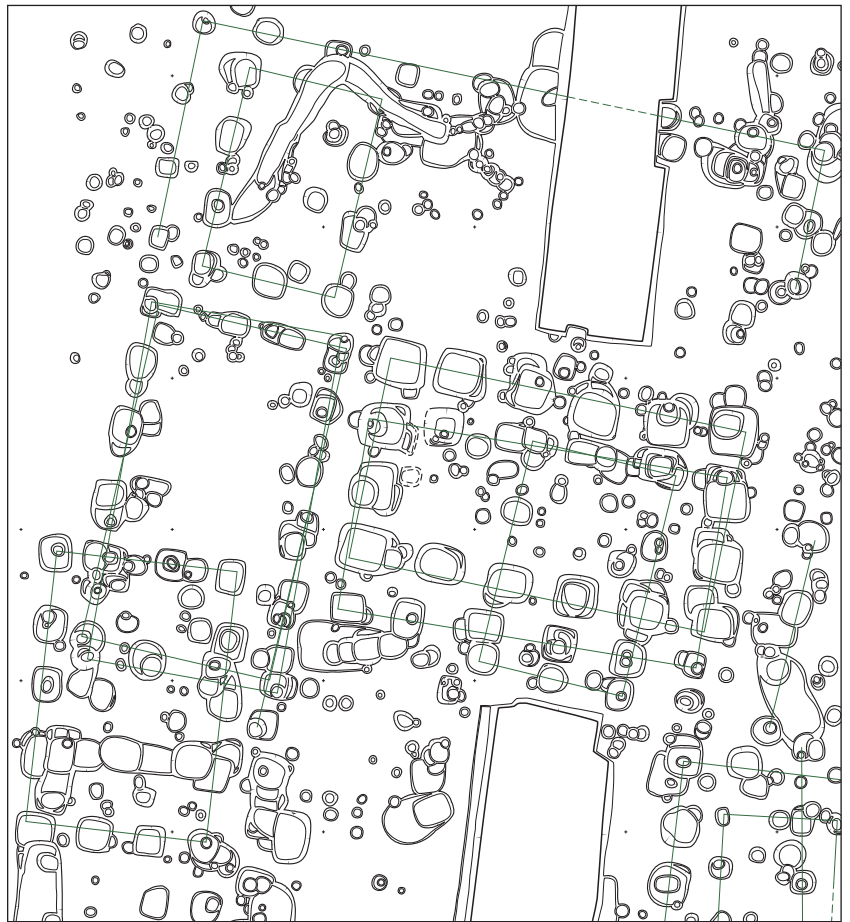
この官衙施設の性格について、結論は出ておりませんが、地方官衙研究をされている山中敏史氏の指摘するように郷単位の独自の施設ないし郡衙の出先機関と考える見方もあります。場合によっては、大曾郷の郷家であった可能性も考えられます。

そして、今回の調査で、これまでに復元した建物跡の多くは、出土遺物が限られたものの8世紀後半から9世紀前半のものともみられ、土佐国衙跡で建物跡が最も多く確認される時期とも符合します。

一方、遺物については、時期による出土量の違いがあるものの白鳳期から平安時代後期頃までのものがみられ、少なからず各時期の掘立柱建物跡が存在したものとみられ、これら掘立柱建物跡は、道路遺構(SR-6003)の東側に展開し、棟方向により大きく8期に区分されます。



18 西野々遺跡最大の掘立柱建物跡



19 西野々遺跡最大の掘立柱建物跡と周辺の建物跡平面図(S=1/200)

## 陶硯と文字資料

8点を確認しましたが、いずれも転用硯で、須恵器の杯身を転用したものが3点、杯蓋を転用したものが3点、甕の破片の内面を使用したものが2点でした。土佐国では転用硯の出土が目立ちます。今回の資料も土佐国の様相と符合しており、甕の破片の利用は黒潮町宮崎遺跡の例に似ています。また、陶硯の出土は官衙関連と寺院跡に限られており、本遺跡も官衙関連と考えて間違いなさそうです。时期的には杯身と杯蓋が8世紀末から9世紀前半、甕の破片の転用が9世紀後半頃とみられます。

文字資料については須恵器の壺の肩部に「大」の刻書が残るものが1点出土しました。



20 「大」の刻書のある須恵器 壺



## 素焼土器の様相と変遷

本遺跡では、放射線状の暗文が施されたものを初現とし、ミズビキ技法(ロクロ一本挽き成形：B技法)のものまでみられ、いわゆる左手手法による土師器からB技法と呼称している土師質土器へと変遷します。

まず、奈良時代は基本的に左手手法の土師器が主体で、暗文を施すものからヘラ磨きのみのものへと簡素化し、平安時代前期には部分的に施すものから全く施さないものへと移り変わり、甕などの煮炊具で生産は続くものの、食器類のほとんどは須恵器と同じ成形技法(粘土紐巻き上げロクロ成形：A技法)で製作された土師質土器に代わります。これに呼応するかのように口縁端部にみられる折込みも簡略化し、平安時代中期にはみられなくなります。

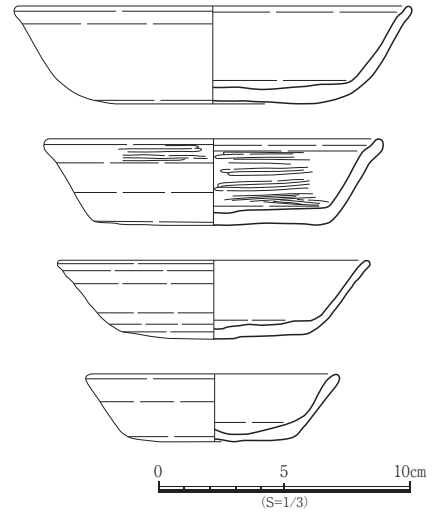
一方、土師質土器は須恵器工人の中から生まれたと考えられ、地域によっても違いがみられますが奈良時代後半から平安時代を通じ、一部中世段階でも前述のA技法で製作されます。また、須恵器に土師器と全く同じ形状の皿などがみられることから土師器工人との交流も示唆されます。

土師質土器の生産は、須恵器生産の減少と軌を一にしており、9世紀後半以降増加し、10世紀には須恵器に取って代わるものとみられ、須恵器生産は壺や甕など限られた器形になります。平安時代中期には器形の縮小化がみられ、小杯や小皿が出現し、後期には汀溪窯系の白磁碗を模倣したのではないかとみられる体部外面に回転ヘラ削りを施し、輪高台となる椀が出現します。鎌倉時代にはB技法で小皿が製作されるようになることとみられ、徐々に杯にも採用されるようになったものと考えられます。

ただし、室町時代前半頃までのものは器面調整が比較的丁寧で、回転ナデ調整でロクロ目をナデ消しており、判然としないものもみられますが、後半頃から内面を中心にミズビキ痕が明瞭に残ると共に底部の縮小化に向います。

種類	時代	奈良時代	平安時代		鎌倉時代	室町時代		
			前半	中葉	後半	前半	後半	
土師器		<div style="background-color: black; width: 100%; height: 10px;"></div> <small>(食器類は手づくね土器を除き、ロクロ成形される土師質土器となる。)</small>						
須恵器		<div style="background-color: gray; width: 100%; height: 10px;"></div>						
土師質土器		<div style="background-color: black; width: 100%; height: 10px;"></div>						
		A技法		B技法				
		回転ヘラ切り		回転糸切り				

㉑ 土師器・須恵器・土師質土器の変遷概念図



㉒ 素焼土器の変遷

## 搬入品の様相

今回の調査では、細片も含め緑釉陶器55点、灰釉陶器49点が出土しています。緑釉陶器には軟質系と硬質系があり、前者はいずれも畿内産のものとみられ、平高台から輪高台となるものと猿投産ではないかとみられる削り出し高台の椀が出土しています。このことから時期的には9世紀から10世紀初め頃のものだと判断されます。

灰釉陶器も細片が多く、時期判断資料に乏しいですが、底部が遺存するのを見ると三角高台のものと三日月高台のものがあり、黒笹14号窯式後半から黒笹90号窯式中頃のものだとみられることから平安時代前半の9世紀中葉から後半の時期と考えられます。

いずれも、西野々遺跡の最盛期に搬入された遺物と言えます。なお、県内では灰釉陶器の出土は緑釉陶器の出土に比べ少なく、東海地方との交流を考える上で貴重な資料となっています。

また、黒色土器も内黒の黒色土器Aから全面炭素を吸着させて黒くした黒色土器Bまで一定みられます。



㉓ 緑釉陶器 皿



㉔ 灰釉陶器 皿



㉕ 黒色土器 椀

## 中世一 方形区画墓

Ⅲ区から2条の溝で区画された土坑墓が検出されました。香川県や神奈川県では周溝を持つものは確認されていますが、いずれも陸橋があり、前者には主体部がなく、後者には4個の蔵骨器が確認されており、全く同じものは全国的にも確認されておられません。確認されたお墓は、長辺1.60m、短辺0.84m、深さ34cmを測る主体部を2重に溝で区画しており、内側の溝は一辺3.85～4.15m、幅0.49～0.65m、深さ12～23cmで、主体部とは南が0.5m、他の方向



26 Ⅲ区で検出された方形区画墓(SK-356)

が約1.0mの間隔があります。外側の溝は一辺5.40～6.45m、幅0.47～0.74m、深さ6～17cmで、内側の溝とは東側が接し、西側が約1.0m、北側が0.1～0.5m、南側が0.5mの間隔を持っていました。副葬品として、主体部から土師質土器の杯と小皿が出土しています。



27 副葬品出土状態

## 屋敷跡の出現と遺跡のその後

西野々遺跡では、西側で400㎡程度の小規模な屋敷地が確認され、東側のⅥ区とⅦ区で、一辺35～44mの屋敷跡が検出されています。屋敷地は約1,540㎡に及び、四国の屋敷地の状況から考えると土豪クラスとみられ、佐川町岩井口遺跡のような荘郷単位を掌握した在地領主クラス(国人)の館より小規模で、家臣が居住する屋敷は付随していませんが、屋敷東側からは10棟余りの建物跡が復元できたことから、屋敷以外にも下人の住まいがあった可能性が示唆されます。

建物跡については、丁度、屋敷跡の中央が調査区境になっている関係もありますが、復元できた建物跡は間仕切柱

のある中世型掘立柱建物と古代から続く律令型掘立柱建物で、あまり大型の建物はみられません。また、北側の入口とみられる部分が枳形状を呈しており、防御の色合いを感じさせます。一方、出土遺物には茶釜があり、屋敷の主人には茶の湯を嗜む戦国武士の姿が浮かびます。

今回、一定規模の屋敷跡が確認されたことから西側に展開する小規模な屋敷はこの屋敷の傘下に置かれていた可能性も考えられます。

近世以降は土坑などが散発的にみられるものの目立った遺構はなく、耕作地となり、西野々遺跡は水田の下に埋もれ、現在に至っています。



28 屋敷跡平面図(S=1/500)

- 編集・発行 高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 発行年月日 平成23年9月16日
- 印刷 〇〇印刷